

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：16401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14318

研究課題名（和文）教職志望学生の正課内外における学びの連環を促す学習環境デザインの構築と検証

研究課題名（英文）Development and examination of learning environment design to promote the linkage of learning in and out of the class for teacher trainee students.

研究代表者

野中 陽一郎（Nonaka, Yoichiro）

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：30735270

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教員養成段階での正課内外における学びの連環を促す学習環境デザインを教職志望学生のタイプに基づき構築及び検証することを目的とした。

そのため、教職志望学生のタイプは、学びという視点に基づきどう規定するべきか検討した。例えば、以下の2つの内容があげられる。1点目は、教職課程コアカリキュラムの視点を踏まえた正課内活動や正課外活動の在り方の検討である。2点目は、正課内外の学びを架橋するラーニング・ブリッジングや時間管理といった要因に基づき教職志望学生のタイプに関する検討である。こうした知見を踏まえ、教職志望学生のタイプに応じた学習環境の在り方を提案し、事例検討を通じた実践研究を展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、大きく2点の学術的・社会的意義を有する。1点目は、教職志望学生の学習タイプや正課内外の学びの在り方、正課内外の学びを架橋する要因に関する知見を示したことである。2点目は、教職志望学生の学習タイプに応じた学習環境の在り方を提案および個別事例的な実践研究を実施し、教職志望学生の正内外の学びの連環を促したことである。

以上のことから、教員養成段階での正課内外における学びの連環を促す学習環境デザインを教職志望学生のタイプに基づき構築及び検証した本研究の知見は、今後の我が国の教員養成の学びの在り方を検討する上で一定の貢献があったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop and examine learning environment design that promote the linkage of learning in and out of the class for teacher trainee students, based on the teacher trainee student's types. For this purpose, the author examined how the learning types of the teacher trainee students should be defined. For example, the following two points were investigated. The first is an examination of the ways in which in-school and out-of-school activities should be conducted from the perspective of the core curriculum for the teaching profession. The second is an examination of the types of teacher trainee students based on factors such as learning bridging and time management. Based on these findings, learning environment design appropriate for different types of teacher trainee students were proposed, and practical research was conducted through case studies.

研究分野：学習科学

キーワード：学習タイプ 正課内外の教育 準正課活動 省察 リアクション・ペーパー 正課内外の学び

1. 研究開始当初の背景

教員養成大学・学部では、教職志望学生に教員として最小限必要な資質能力を身につけさせる質保証を課すため、養成しようとする教員像や到達目標を明確化し、当該基準を達成する組織的なシステム構築を進めてきた。この種の研究は、教師として必要な資質能力を育むカリキュラム整備や教職実践演習のモデルといった正課内での学びに注目したものが数多い。また、正課内での学びを豊潤にする視点として、教職志望学生の着手した教育実践における省察の意義なども改めて重要視されている。しかし、教職志望学生の学びを包括的に捉え支援を行うためには、正課内での学びの在り方だけでなく、正課外での学びの在り方も併せて検討する必要がある。すなわち、正課内での学びと正課外での学びのそれぞれを区分して捉えるのではなく、正課内外における学びを連環するためにはどうすれば良いのかという視点が求められる。こうした視点に鑑み、教職志望学生の正課内外における学びの連環を促す学習環境デザインの構築が出来れば、今後の教員養成段階の学びを検討する上で大きな意義を有する。

教職志望学生の正課内外における学びの連環を促す学習環境を構築するためには、養成しようとする教員像や到達目標に到るまでの正課内外における個々の教職志望学生の「学び」に着目する必要がある。教職志望学生の「学び」の捉え方には、多様性が考えられる。例えば、教職志望学生の養成段階の場を高等教育の枠組みから捉えるならば、単位取得のためには、授業時間とその前後に伴う予習及び復習を総括した必要時間数が定められている。つまり、学習時間は、「学び」が顕在化する1つの指標として捉えることが出来る。しかし、学習時間という学習の量だけでなく、学習の質はどうあるべきなのか、正課外の学びの在り方をどう捉えることが出来るのか等、教職志望学生の学びの実態に併せた検討を重ねる必要がある。無論、教職志望学生の学びや成長を網羅する高等教育という概念は、複雑で文脈により多義的な性質を有する。そのため、教職志望学生の「学び」に寄与する種々の要因については、整理・検討される必要がある。そして、全教職志望学生を一律に扱うのではなく、教職志望学生のタイプ別に正課内外における学びの連環を促す学習環境デザインを構築し、学習支援内容を継続的に検証していくことが必要不可欠となる。

こうした点を解決するためには、教職志望学生のタイプは、学びという視点に基づきどう規定すべきか検討し、教職志望学生の正課内外の学びを包括した学習タイプを複眼的な枠組みから理論的・実証的に検討することが求められる。また、こうした知見の積み上げに併せ、教職志望学生の所属先の特性や状況に応じた実行可能な正課内外における学びの連環を促す学習環境はどうあるべきか検討することも必要不可欠となる。そして、最終的には、教職志望学生のタイプに応じた正課内外における学びの連環を促すダイナミックな学習環境デザインを構築するための探索的な知見を獲得することが求められる。

2. 研究の目的

本研究は、教員養成段階での正課内外における学びの連環を促す学習環境デザインを教職志望学生のタイプに基づき構築及び検証することを目的としている。具体的には、教職志望学生のタイプは、学びという視点に基づきどう規定すべきかを検討し、教職志望学生の正課内外の学びを包括した学習タイプを検討すること、教職志望学生の学びを育む教育実践や学習支援内容の要因分析を行うことである。そして、教職志望学生のタイプに応じた正課内外における学びの連環を促すダイナミックな学習環境を提案し、アクションリサーチに基づく学習環境デザインの構築と検証を行うことである。

教職志望学生の正課内の学びを検討するためには、時代的な変遷および本研究課題の着手時期に留意する必要がある。具体的には、全国の教員養成機能を備える大学においては、2019年4月1日から新たな教職課程が実施されることとなった。すなわち、教職課程コアカリキュラムに基づき、全ての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力が示され、各大学では教職志望学生に対して、教職諸科目の内容理解に加え、コアカリキュラムにおいて求められる資質能力を育むことが求められている。教職課程コアカリキュラムにより明示された全体目標及び一般目標や到達目標を達成するため、各授業担当者は、これまでの学問領域や教育的介入により蓄積された知見を踏まえ、各目標に到る授業内での学びやカリキュラムをどのように構築するか意を払いつつ創意工夫した教育実践を展開していることが予想される。そのため、教職課程コアカリキュラムの導入に伴い、構造化された目標設定に基づき、いかに学習者中心の学習環境は創出されているのかという正課内教育の実態も踏まえつつ、本研究課題を展開する必要性があった。

3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を達成するため、文献調査、質問紙法、インタビュー調査、教職志望学生とのアクションリサーチに基づく方法等を用いた。文献調査は、主に教職志望学生のタイプは、学びという視点に基づきどう規定されるべきかを検討するためのものであり、教職志望学生の正課内外の学びを包括したタイプの構築に向けた理論的検討、教職志望学生のタイプを構成

する構成概念の構築，重要な要因の選定を行うために実施するものであった。質問紙調査は，主に教職志望学生のタイプ，教職志望学生の学びを育む教育実践や学習支援内容を検討するために実施するものであった。インタビュー調査や教職志望学生とのアクションリサーチは，主に教職志望学生の学習タイプに応じた正課内外における学びの連環を促すダイナミックな学習環境を提案し，アクションリサーチに基づく学習環境デザインの構築と検証を行うためのものであった。

4．研究成果

研究成果については，研究成果報告書提出時点で論文等による成果公表を終えた内容を中心に概要を報告する。

(1) 教職志望学生の正課内外の学びを包括したタイプの構築に関する理論的検討

教職志望学生の所属先も含意される高等教育では，学びや成長を「成果」という観点から捉え重視する傾向がみられる。特に日本でも2000年以降にこの傾向が強まっていた。このことは，成果を導く授業や教育プログラムを介した正課内プロセスにも意を払うべきことを暗黙裡に示している。学びの主体者である教職志望学生が成果を達成出来るためには，教育課程である大学の正課内での学びを体系的かつ教職志望学生を中心としたものに改善していく必要性があった。また，教職課程コアカリキュラムにより明示された全体目標及び一般目標や到達目標を達成するため，大学や学部の独自性を踏まえつつ，教職志望学生自身の探究を保障するための専門科目も含めたカリキュラムマネジメント，各授業の質を向上させる取り組みの必要性が示唆された。

一方，学びや成長は，大学の授業すなわち正課内での学びの枠組みだけでなく，授業外での部活やアルバイトそしてコミュニティへの参加による学びといった正課外での学びの枠組みも改めて重要視する必要性があった。すなわち，正課内外の学びや大学生活を総括して捉えつつ，教職志望学生の学ぶ姿勢に寄与する要因に意を払い支援していくことが求められている。こうした視点に鑑みれば，自分の学習内容と将来の自分の目標とを時間軸の中で相対的に位置づけ，学習を架橋するスキルを身に付け，主体的かつ積極的に大学生活全般にかかわっていくことを顕在化する要因，自律した学びや生活を創り出す自己調整過程に附随する要因を選抜し，教職志望学生の学びという視点からタイプを規定する必要性が示唆された。

こうした理論的検討を踏まえ，教職志望学生の学びという視点に基づき，河井・溝上(2012)の提唱したラーニング・ブリッジング，時間管理，半澤・坂井(2005)の指摘する大学での学業と将来の目標である職業の接続意識，キャリアイメージといった概念に着目した正課内外の学びを包括したタイプを構築する必要性を見出した。

(2) 教職志望学生の正課内外の学びを包括した学習タイプの検討に向けた実証的検討

理論的検討より見出した各概念に鑑み，構成概念や尺度構成，学習プロセスの時期的変容に留意しつつ，学びのタイプを多角的に捉えるため，教職志望学生を調査協力者として複数の質問紙調査を実施した。例えば，1) 大学生の半期の授業期間の変容に着目し，ラーニング・ブリッジングを構成する3つの観点の変容からタイプを類型化するため，縦断データを採取し，各変容得点に基づきクラスタ分析を実施した。その結果，授業間・異時点間向上型，学習架橋向上型，学習架橋低下型といったタイプがあること，各タイプに対する支援方策の違いが示唆された。2) 教職志望学生の学業と職業の接続に対する意識の実態について，学業と職業の接続の理想状況，理想と現実のズレといった複眼的な指標からクラスタ分析によりタイプを類型化した。その結果，理想得点中・ズレ得点低型，理想得点高・ズレ得点低型，理想得点高・ズレ得点高型といったタイプがあること，全てのタイプにおいて学業と職業の接続の理想状況の得点が高いという教職志望学生の特徴を見出した。こうした探索的な研究知見を積み上げつつ，タイプに応じた支援の在り方を工夫し，正課内外の学びを連環させる場や正課外活動の新たな在り方を検討する必要性を見出した。

(3) 教職志望学生の学びを育む教育実践や学習支援内容の要因分析

教職志望学生の学びを育む教育実践や学習支援内容の一例として，リアクションペーパー(以下，RP)は，大学生の内化と外化を往還させる授業内で工夫出来るものと考えられた。そのため，RPに注目し，授業者による介入を改善した授業実践，RP記述に対する自己認識と学習アプローチとの関連，RP記述に対する自己認識のタイプを検討した。その結果，深い学習アプローチには内容記憶志向との間に負の相関が示され，記述訓練志向との間に正の相関が示された。また，RP記述に対する自己認識に基づき4つの特徴的なタイプを見出し，認識変容を促す必要性のあるタイプに対する支援方策を検討した。

(4) 学習環境デザインの構築と検証

教職志望学生の学習タイプに応じ，正課内外における学びの連環を促す学習環境デザインを事例的に複数提案・構築し，プログラム評価の観点から効果検証及び課題改善に着手した。具体的には，教職志望学生の教職キャリアイメージ，ニーズ，学年段階等の学習タイプに応じ，正課外での活動の場および省察の機会を協働で創り，準正課活動としての支援を行った。活動の場としては，「言葉と数の教室(小学1年生に対する放課後の学びの支援)」，「和サークル(不登校支

援の居場所づくり)」、「授業観察」、「中学生に対する学びの支援(数学プロジェクト、英語プロジェクト、体育プロジェクト)」であった。その結果、教職志望学生自身の資質能力向上や次の課題の可視化に繋がることを事例的に示した。なお、教職志望学生の学びを支援するためには、正課内だけでなく、正課外での活動の場だけでなく、当該活動を個人および集団で省察する場が必要であった。加えて、教職志望学生の正課外での活動を教職員が支援する準正課活動として展開するためには、活動の場を創る関連機関や組織との協働体制も必要であることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 野中 陽一朗	4. 巻 46
2. 論文標題 リアクションペーパー記述に対する自己認識と学習アプローチとの関連	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 57～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15077/jjet.S46033	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 野中陽一朗	4. 巻 TL2022-29(2022-12)
2. 論文標題 教職志望学生は授業観察において何を捉えているのか - 道徳科に着目して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 21-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野中陽一朗	4. 巻 45
2. 論文標題 児童生徒の理解状態を表出する非言語的行動の類型化と特徴	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 73～76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15077/jjet.S45037	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 野中陽一朗・常行泰子	4. 巻 70
2. 論文標題 大学生の時間管理と生活スタイルとの関連に関する探索的検討 - 日常生活の中での運動ステージ・健康行動・ソーシャルネットワークに焦点を置いて -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高知大学学術研究報告	6. 最初と最後の頁 139-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野中陽一朗	4. 巻 3
2. 論文標題 授業内外の学習を接続する絵本作成() - 絵本作成の内容とスキルの類型	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高知大学学校教育研究	6. 最初と最後の頁 139-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野中陽一朗	4. 巻 120
2. 論文標題 大学生の時間管理に対するラーニング・ブリッジングの影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告(IEICE technical report) 信学技報	6. 最初と最後の頁 23-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野中陽一朗	4. 巻 2
2. 論文標題 授業内外の学習を接続する絵本作成() 絵本作成と読み聞かせに関する基礎的資料	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知大学学校教育研究	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 時間管理の変容に基づく大学生のタイプ 大学生の半期の授業期間での変容に着目して
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 富田英司・野中陽一朗・三和秀平・坪田 康・豊田弘司・森下 覚
2. 発表標題 準正課活動を通して教員志望学生の主体的な学びを支援するには
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野中陽一朗・近藤修史・岡林千裕・池本浩子・玉瀬友美・岩城裕之
2. 発表標題 教職志望学生に対する附属学校園と連携した準正課活動の取り組み - 附属学校園のニーズを反映した学習支援「言葉と数の教室」に着目して -
3. 学会等名 令和4年度日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 教職志望学生は授業観察において何を捉えているのか 道徳科に着目して
3. 学会等名 思考と言語研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 教職志望学生は主体的に準正課活動を進める上でどのような支援を求めているのか? - 活動時期の特徴を踏まえて -
3. 学会等名 第29回大学教育フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 高知大学教育学部における正課内外を介した活動支援に関する一考察
3. 学会等名 第179回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中陽一朗・富田英司・三和秀平・坪田康・杉本喜孝・山本昭夫
2. 発表標題 Co-agencyを育む支援とは
3. 学会等名 第179回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nonaka Yoichiro
2. 発表標題 How reflection papers affect students' approach to learning
3. 学会等名 The 32th International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 ラーニング・ブリッジングの変容に基づく学習タイプの探索的検討 大学生の過ごした半期の縦断データに着目して
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中陽一朗・川島 哲・笹屋孝允・富田英司・住田裕子・森 敏昭
2. 発表標題 授業の諸相 授業現象に対する研究視点の独自性と実践的視座を踏まえた共有可能性
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊ひとみ・野中陽一朗・稲垣勉・河越隼人・水野邦夫
2. 発表標題 青年の適応を促す環境づくり 学習文脈と対人文脈に着目して
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 教職志望学生は提示された放課後活動に対してどのようなイメージを抱くのか？ - 高知大学教育学部所属の1年生を対象として
3. 学会等名 第182回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中陽一朗・森 寛暁・近藤修史・幸 篤武
2. 発表標題 児童の時間管理支援に関する探索的検討 児童の自己評定に基づく変容に着目して
3. 学会等名 中国四国心理学会第77回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 高知大学教育心理学研究室の概要と今後
3. 学会等名 第185回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中陽一朗・常行泰子
2. 発表標題 大学生の健康行動はどのように捉えられるのか？ 普段の生活で実践されている健康行動の位置づけと正課内外の実態との関連に着目して
3. 学会等名 第28回大学教育フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 教育実習は実習生にとってどのように意味づけられるのか？ 身体活動量の特徴に基づく教育実習日の学びと困難さに着目して
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 授業内外の学習を接続する学習支援の検討 絵本作成の課題に着目して
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊ひとみ・河越隼人・野中陽一朗・稲垣勉・水野邦夫
2. 発表標題 複合的視点から青年のこころと生活を覗く 青年の精神的健康はどう予測されるのか
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 大学生の時間管理に対するラーニング・ブリッジングの影響
3. 学会等名 思考と言語研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 看護師志望学生のタイプに関する探索的検討 ホスピタルアートの必要性も参照しながら
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 教職志望学生における学業と職業の接続に対する意識と学習の質及び量 - 学業と職業の接続の理想状況及び理想と現実のズレを参照しながら
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大久保智生・有馬道久・野中陽一朗・町岳・岸俊行・富田英司
2. 発表標題 教師の授業マネジメントを考える
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤江康彦・野中陽一朗・梶井芳明・野崎秀正・森敏昭
2. 発表標題 教職課程コアカリキュラムは「教育心理学」のありかたをどう変えるか 新課程における教職科目と学問との関係性を問う
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野中陽一朗・岡谷英明
2. 発表標題 学校教育教員養成課程4年生へのアンケート調査 学業と職業の接続意識及びキャリアに応じた卒業後の支援ニーズ
3. 学会等名 令和元年度日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野中陽一朗・秋山涼・河端涼・喜多真明
2. 発表標題 リアクションペーパーの記述理由に基づく大学生の特徴
3. 学会等名 中国四国心理学会第75回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野中陽一朗
2. 発表標題 大学生のキャリア意識に基づくタイプの類型化 タイプごとの学業と職業の接続に対する理想意識も参照しながら
3. 学会等名 日本キャリア教育学会第41回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野中陽一朗・常行泰子
2. 発表標題 大学生の時間管理が正課内外の学びおよび運動スポーツの実施に及ぼす影響
3. 学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 三田部勇・米沢崇（編）・蘆田智絵・李禧承・一色玲子・大西祐司・亀岡圭太・北山佳恵・久保研二・古賀竣也・齋藤拓真・志田正訓・関野智史・高橋均・立田瑞穂・田邊良祐・中井悠加・野中陽一朗・早坂淳・藤井真吾・藤井瞳・藤木大介・牧瀬翔麻・三島知剛・三田沙織・宮木秀雄・村井輝久・山田洋平・山崎茜・若山育代	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 153
3. 書名 新・教職課程演習 第22巻 教育実習・教職実践演習	

1. 著者名 藤原 和政、谷口 弘一、藤原 健志、大内 晶子、金重 利典、谷口 康祐、石井 僚、川俣 理恵、村上 達也、大谷 和大、西村 多久磨、鈴木 雅之、福住 紀明、野中 陽一朗	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 学校現場で役立つ 教育心理学	

1. 著者名 常行泰子, 柴英里 編著, 野中陽一朗, 吉岡一洋, 野角孝一, 森田佐知子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 135
3. 書名 教育とヘルシーエイジングー持続可能な社会の実現を目指してー	

1. 著者名 有馬道久・大久保智生・岡田涼・宮前淳子（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 180
3. 書名 学校に還す心理学 - 研究知見からともに考える教師の仕事 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------